

郷土資料館だより

Vol.40 No.3
2018.3.15

企画展「新規収蔵品展—明治から昭和の三島—」開催中

●開催期間 平成30年2月24日(土)～6月3日(日)

三島市郷土資料館では平成27～29年度の間に、市民の皆さまから数多くの貴重な歴史・民俗・美術資料のご寄贈をいただきました。また、市場の資料から、数点の三島に関わる歴史資料も購入しています。

これら三島市郷土資料館に集まってきた資料を展示紹介することにより、三島及び北伊豆地域の特色ある歴史と、ここ1世紀余りの間に急激に変化していった産業や庶民の生活をふり返ります。

主な展示資料は次の通りです。(寄贈された資料と購入資料のうち約100点)

- 三島のスポーツの歴史を語る資料のうち、東京オリンピック聖火リレー資料や1960年代まで行われた八乙女神社祭典奉納相撲と末広山観音奉納競馬祭の優勝旗などと、戦前の女子高生徒の体操写真を展示紹介しています。
- 小松宮彰仁親王の書、下田舜堂画伯の富士山、三四呂人形関係資料、三島茶碗、江戸時代の浮世絵(川中島合戦図ほか)など芸術的価値が高い資料を初公開しました。
- なつかしい庶民の暮らしから、紙芝居(黄金バット)、姉さま人形、尋常小学校教科書、夜着、ワープロ、1930年代の自動車カタログ及び明治から昭和の三島の絵葉書などを展示しました。
- 歴史資料から三島宿資料(川口家旧蔵資料)、北上村和優講資料など、注目される資料を公開しました。

●小松宮彰仁親王に地元有志が献上した板絵(寄贈資料)



この板絵は「陸海軍聯合大演習之図」です。小松宮彰仁親王が明治時代、三島に別邸を造営した頃に、地元の有志が親王に献上した板絵と考えられています。縦175cm横335cmの大作ですが、17枚の板に分割された状態で発見されました。損傷が激しいため写真で展示紹介しています。

絵の内容は伊勢湾周辺で演習を行った様子を描いており、半田、鳥羽などの地名が見られます。

●川口家旧蔵資料（寄贈資料）

川口家は林光寺(加屋町)の開基で戦国大名武田勝頼の庶子と伝わる故信上人を追って甲斐国(山梨県)から三島に来た七家臣のうちのひとりの末裔とされています。

また江戸時代には名主などの町役人を勤めたため、江戸から明治初期の古文書を多く伝えていました。今回は寄贈された資料の中から三島宿関係資料と、川中島合戦を描いた浮世絵を紹介しています。

○武田三代記 信州川中嶋大合戦 江戸時代後期（19世紀）

浮世絵 一猛斎（歌川）芳虎 画

中央に武田信玄に斬りかかる上杉謙信と謙信の刀を軍配で受ける信玄、という川中嶋の合戦の名場面が描かれています。

当主の故川口英男氏は戦国大名武田氏の研究に熱心に取り組んでおり、その一環として武田氏に関する浮世絵を多数収集していました。



●人々の羨望の的—自動車のカタログ（寄贈資料）

昭和初期の自動車のカタログです。外国車のフォード、オースチン、シボレー、スチュードベーカーなどのカタログはカラーで豪華です。人々が憧れる車でした。

それに対し、戦後の国産のトヨタ・日産などのカタログは地味で実用的なものです。

この資料は三島で最初に乗用車を購入したといわれる家に保存されていました。



次回企画展 平成30年6月23日(土)～平成31年1月3日(木)

富士・沼津・三島3市博物館共同企画展 明治150年 幕末・明治の富士・沼津・三島

「近代三島をつくった人々」

前期 政治・教育編 6月23日(土)～9月24日(月祝)

後期 経済・文化編 10月13日(土)～1月3日(木)

幕末維新の混乱や三島を通らない東海道線の開通など様々な困難に立ち向かい、新しい社会をつかっていった三島の人々を中心に、明治期の三島を紹介します。

三島の歴史とジオポイント 12

— 間眠神社 —

間眠神社(東本町2-11-35)は、約2,900年前に発生した富士火山東斜面の大崩壊に伴い数百年間続いた大規模な土石流(御殿場泥流)の堆積面上にあります。神社の西側は泥流堆積物を浸食した湧水河川御殿川の作った低地と比高約2mの浸食崖で接しています。

まず、神社周辺の景観の変貌を見てみます。1806年頃の「根府川通見取絵図」では、神社は三島宿の南のはずれ二日町の外側にぽつんと描かれています。明治20年の地形図でも同様で、周囲は全て水田です。昭和7年の地形図では神社の北側まで宅地化が進み、西側の崖下には線路を隔てて知徳高校の前身「三島実践女学校」(昭和5年開校)が認められます。空中写真では昭和14年には神社東側の下田街道沿いの家数が増え出し、昭和23・27・36年もほぼ同じ状況ですが、昭和44年の写真では、神社の西側も建物で埋め尽くされています。高度経済成長に伴って急速に宅地化が進んだようです。かつては「三島菅笠」の材料となったカサスゲが繁茂していた御殿川低地・大久保の水田地帯もこの時期に宅地化が進みました。僅かに残っていた神社南側の水田も昭和63年には宅地化が始まり、平成24年には消滅しています。

神社の祭神は食物を司る女神である豊受姫命です。大昔、狩野川の洪水で伊豆の国市・長崎にあった稲荷神社の祠が流れ着き、当地に祀ったのが始まりとされています。実際、昭和49年の七夕豪雨では、御殿川低地に沿って、神社南側の青木原付近まで水没していますから、治水対策が不十分な大昔では神社西側の崖下付近まで浸水したのでしょう。神社に入って目に付くのが重さ80Kgを越す「大しめ縄」です。稲荷の祠は後に長崎に返還されましたが(現・金子稲荷)、長崎の人達はお礼に、毎年8月1日の神社例祭に合わせ「大しめ縄」の奉納を続けています。

間眠神社の名前の由来は、治承4年(1180)源頼朝が源氏再興のため、三嶋大明神に百日の丑刻(午前1時～3時頃)祈願の帰り道、路傍の祠の松の大樹の下で度々まどろんだとの伝説によります。頼朝は神社東側の南北に伸びる「在庁道」を通ったことでしょう。間眠の松は何度も植え替えられ現在は6代目です。

神社には10基の石燈籠があります。鳥居左手には古い燈籠が4基並んでいます。一番左側の燈籠は当社には不釣り合いなほどの大きさです。火袋と中台を欠き、高さ84cmの角型の竿の正面に「常夜燈」側面に「三嶋大明神」「文政五(1822)壬午三月吉日」と彫られています。基礎には「二日町中」とあります。竿の記載や大きさからして、三嶋大社に奉納されたものが、安政地震(1854年)か北伊豆地震(昭和5年)で倒れ火袋等が粉碎したため、当社に移された可能性が高いです。

日隅神社の大燈籠2基は、北伊豆地震で倒壊破損し、三嶋大社から移設したことは、郷土資料館だより第109号で報告しました。この燈籠も同じ運命をたどったのでしょうか。

本燈籠の石材は全て長岡凝灰岩上部層製(数百万年前、伊豆半島が南海の火山島群だった頃、噴火で海底に堆積した火山灰や火山砂が固結し、熱水の影響を受けてやや変色したもの。産地は伊豆の国市北江間、通称・江間石)です。

本殿脇の稲荷神社には、安永5年(1776)奉納の石燈籠(長岡凝灰岩上部層製)や、同時に奉納された手水鉢(安山岩製)があり、また玉垣の外には関東地震か北伊豆地震で壊れた鳥居の柱(安政5年・長岡凝灰岩上部層製)や、境内北側の広場には江戸時代と思われる石橋(三島溶岩製)や御殿場泥流起源の垂角礫が多数認められます。これからも大切に保存していただきたいものです。(郷土資料館運営委員 増島淳)



間眠神社正面(大しめ縄が目立つ)



三嶋大社から移設された大燈籠

三嶋大社の古文書を読み解く / 3

◆足利尊氏の古文書② 箱根竹之下の戦いと12月11日付けの寄進状

前回に続き建武政権期の古文書です。政権が誕生し2年を経た**建武2年**(1335)7月、北条時行らの反乱が起きます(中先代の乱)。後醍醐天皇の許可を得ずに出陣した足利尊氏は、瞬く間に乱を鎮圧しますが、鎌倉にとどまり政権からの離脱の姿勢をみせたため、反逆者の烙印を捺され窮地に陥ります。しかし12月11日から13日にかけて、一般に「箱根竹之下の戦い」と称される、箱根～三島(伊豆国府)～小山方面での合戦で、尊良親王・新田義貞を主将とする追討軍に完勝し、それまでの劣勢をはね返します。南北朝の内乱の呼び水となった、時代の分水嶺とも言い得る戦いです。写真は、合戦当日の緊迫した状況下において、**三嶋大社に宛てた足利尊氏の寄進状**です。

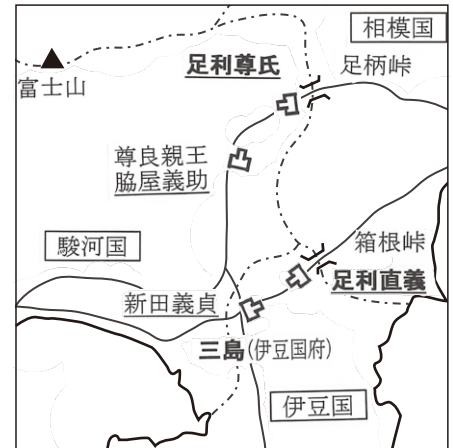
少し文書の背景に分け入ってみましょう。実のところ尊氏は、天皇との対決をためらい、一時総大将の立場を放棄し、浄光明寺に籠もってしまいます。しかし、足利方の劣勢を見かね、出陣を決意します。ひとたび決断すると次々と必要な策を打つところが彼の真骨頂で、例えば11日の戦闘直後は、目覚ましい働きをした武将に対し、恩賞を約束する文書を認めています(『梅松論』)。恩賞沙汰は、武将たちの利権、利害に立ち入る問題ですから、事実確認を含め、慎重に進めなくてはならない案件です。しかし尊氏は、常識などお構いなしに、即決の恩賞約束を行います。この大胆な施策に、将士の士気は弥が上にも高まったはずです。また同日、大社に寄進状を寄せたことは、この地域の神社や寺院への手当をも同時に進めたことを推測させます。

さらに文面を見ましょう。1～2行目が薄い色です。身分の高い者が用いるという青墨という高級な墨のようです。尊氏文書では、早くから青墨の使用例が見られますが、一見してそれとわかる場合もあれば、判別が難しい場合もあります。寄進先文言だけ、これほどはっきり墨色が異なる例は珍しく、崇敬の念を示す視覚効果は高かったでしょう。また、3行目の「右所奉」以後少し右に

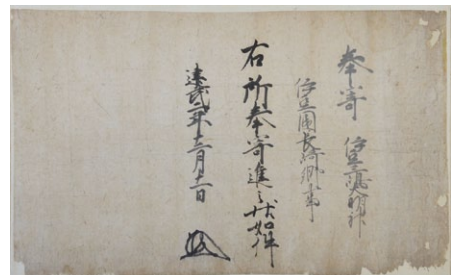
よれ、書き進むにしたがいが文字が詰まり、無理に一行で収めたように見えます。速やかに案件を処理するために、予め尊氏が花押を書き入れた料紙に、後から右筆が内容を認めたためでしょう。さらに、ほんの僅かな差ですが、墨色や文字並びから、1行目の「奉寄」と2行目「伊豆国」を書いた上で、1行目「伊豆三嶋大明神」と2行目「長崎郷事」を書き込んだ様子にもみえます。複数の神社寺院に寄進を行うため、定型の文言を予め書き、寄進先と所領名は確定した時点で書き入れた、という想定もあり得ます。ただ、他の社寺には文書が残っておらず、現時点では確定するだけの根拠にはなりません。とはいえ、先にあげた異例の恩賞約束も然り、陣中にありながら、次々と事案を処理する尊氏の姿が浮かび上がる点には、注目してよいでしょう。

ところで、寄進の地、長崎郷(伊豆の国市)は、かつて三嶋大社が源頼朝から寄進を受けた、重要所領の一つ。たまたまではなく、大社側の要望があって選ばれたはずです。ならばこの時、長崎郷の領有はどうなっていたのか、そして足利方と大社は、いつどの様に接触したのか、興味あるところです。尊氏が鎌倉を出陣するのが12月8日、強行軍で10日に足柄峠を越え、11日早朝から合戦が始まり、三島から追討軍が敗走するのは13日。寄進の日付け11日では、三島は追討軍の勢力下ですし、戦いは続いているのです。合戦を挟んで人々は、私達の想像を超える動きをし、したたかに生き抜いていた、そんなことを考えさせる古文書です。

(郷土資料館運営委員・三嶋大社宝物館学芸員 奥村徹也)



▲箱根竹之下の戦い要図



▲足利尊氏寄進状

企画展「挿絵で見る江川太郎左衛門英龍」報告

- 開催期間 平成29年10月28日(土)～平成30年2月12日(月・振休)
- 展示資料数 86点 ●入場者数 24,185人
- 関連事業 展示解説 11/19(日)、26(日) 11:00～、13:30～ 各回40分程度
参加者 合計 35人(11/19 21人、11/26 14人)

今回の企画展では反射炉や品川台場など様々な分野で功績を残した葦山代官、江川英龍を紹介しました。期間中には楽寿園「菊まつり」やオンラインゲーム「刀剣乱舞」のスタンプラリーがあり、ふだん郷土資料館にはあまり縁のない方々にもたくさん見ていただくことができました。また、挿絵と小出正吾氏による伝記に基づいた展示だったこともあり、「見やすい」「わかりやすい」といった声をいただくことができました。



企画展関連講演会「江川坦庵と幕末反射炉ブーム」

- 開催日時 平成29年11月11日(土)14:00～16:00 ●参加者 83人
- 講師 植松三十里氏(歴史時代小説家)
- 会場 三島市民生涯学習センター3階 講義室

植松先生には江川英龍の業績を関係者の人物像なども交えて解説していただきました。また、反射炉についても当時の製鉄の技術や雄藩の認識など大変興味深いお話をしていただきました。アンケート結果をみると、話がわかりやすかった・説明が丁寧だった、というコメントが多く寄せられていました。



富士・沼津・三島3市歴史講座「明治維新150周年記念 幕末・明治の富士・沼津・三島」三島会場「伊豆地域の近代化と旧葦山代官所」開催報告

- 開催日時 平成30年1月28日(日)14:00～16:00
- 講師 熊本大学永青文庫研究センター准教授
今村直樹先生
- 会場 三島市民生涯学習センター5階 研修室
- 参加者 49人
- 主催 富士・沼津・三島三市博物館連絡協議会

明治維新150周年を記念して、三市博物館連絡協議会では平成29年度から30年度にかけてのテーマを“幕末・明治”に設定し、今年度は三島・沼津・富士の各会場で開催しました。

三島会場では今村直樹先生を講師に招き、旧葦山代官所が有していた人的・物的資本が、伊豆地域の近代化にいかに重要な役割を果たしたか、という点をわかりやすく解説していただきました。事前申込には定員を上回る数の応募があり、当日講座終了後、参加者からは「明治維新を今までとちがった目でみる事ができた」「時間があればもっとお聞きしたい」といった好評の声が多数寄せられました。



そよかぜ学習

- **学習内容** 体験学習 昔の道具の体験
館内見学 2階常設展示室の解説
- **受け入れ学校数** 市内12校・市外7校 計19校

本年度も市内・周辺市町の小学3年生の課外授業「そよかぜ学習」の受け入れを実施しました。2階常設展示室では農家にあがって囲炉裏の役割やフネの使い方等を解説し、1階多目的室では石臼・足踏み式ミシン・棹ばかり・製麺機を実際に体験してもらいました。足踏み式ミシンの体験では、電気を使わず動かせることを説明すると「エコだね!」といった声があがり、電気のいきわたらない時代の大変さとともに、良かった点も知っていただけたようです。



郷土資料館文化財ボランティア報告

平成28年度に実施した文化財ボランティア養成講座の受講者を中心に、古文書整理や石造物調査などの活動を実施しています。平成28年度に引き続き、文化庁補助事業「地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を受け、三島地域資料研究会(事務局:郷土資料館)の事業として実施しています。

(1) 郷土資料館ボランティアスキルアップ講座

- **期 間** 平成29年9月～平成30年2月 5回開催
- **参加者数** のべ106人
 - ① 9/10 三島の指定文化財 参加者:28人
 - ② 9/28 文化財の保存 講師:株式会社墨仁堂 山口喜子氏 参加者:16人
 - ③ 10/12 古文書修復実習 講師:株式会社墨仁堂 山口喜子氏 参加者:15人
 - ④ 12/2 文化財レスキュー 講師:静岡県文化財保護課 菊池吉修氏 参加者:20人
 - ⑤ 2/27 館外視察研修 大磯町郷土資料館 神奈川県立生命の星・地球博物館 参加者:27人

(2) 古文書整理の会

- **期 間** 平成29年5月～平成30年3月
- **実施回数** 毎月2回計19回(予定、休館日等除く)
毎月第2,4木曜日に郷土資料館が所蔵する地域の古文書の整理を行っています。
今年度は贅川他石を輩出した贅川家の文書を中心に整理を進めており、この成果は平成30年度の企画展に活かしていく予定です。



(3) 石造物調査の会

- **期 間** 平成29年5月～平成30年3月
- **実施回数** 毎月1回計9回(予定、4・8・2月を除く)
毎月第3火曜日に中郷地域の石造物調査を行っています。これまでに梅名・安久地区に所在する約100基の石造物について調査票を作成し、続いて大場地区では135基の石造物の所在を確認しました。



郷土教室・体験イベントの報告

郷土資料館では、楽しみながら学べる体験イベントをボランティアさんと一緒に開催しています。平成29年11月から平成30年2月までに行った事業をご紹介します。

日 程	郷土教室	内 容	参加者
11月4日(土)	楽寿園の自然	溶岩・化石の観察、どんぐり・葉っぱで遊ぶ	111人
11月12日(日)	江戸時代の三島宿	三島宿を中心とした展示ガイド、立版古作り	71人
11月12日(日)	昔の暮らし	古い道具を見ながら昔を思い出してみる(回想法)	101人
11月18日(土)	ミニチュアうどん作り	製麺機 <small>せいめんき</small> と小麦粘土でミニチュアうどんを作る	4人
12月16日(土)	ワラ細工 <small>わらこ</small>	ワラで正月飾りを作る	71人
1月20日(土)	リリアン編み <small>あ</small> でイヌを作ろう	リリアン編みで2018年の干支「イヌ」を作る(申込み制)	12人
2月3日(土)	紙すき体験	紙すき体験で葉書作り 三島ゆうすい会協力	92人
2月17日(土)	昔のどうぐ	石臼 <small>いしうす</small> ・鯉節削り <small>かつおぶし</small> ・和菓子の木型などの体験	34人
2月23日(金)	遊んで学ぼう富士山デー	富士山の溶岩観察、富士山にちなんだカルタ	106人

紙すき体験



リリアン編み



ワラ細工



郷土資料館運営協議会委員改選のお知らせ



郷土資料館では館の円滑な運営を図るため、郷土資料館運営協議会を設けています。平成29年度第2回郷土資料館運営協議会(平成30年2月16日開催)では、任期(2年)満了に伴う委員の改選を受け、11人の委員に対し委嘱状交付が行われました。

委員の方々には今後2年間、郷土資料館の運営等について意見や助言をいただき、それらの意見を参考にしながら館の資質向上に努めてまいります。

委員長	迫田信行
副委員長	増島淳
委員	加藤雅功、奥村徹也、橋本敬之、坪井則子、齋藤幸蔵、河合龍明、大村朱実、土屋晃、小藪余志美

任期:平成29年12月10日～平成31年12月9日
(順不同・敬称略)

寄贈 資料の紹介

平成29年11月から平成30年1月までに、次の方々から寄贈のご協力をいただきました。ありがとうございました。(寄贈者の方の希望により個人名を伏せて表記しています)

●寄贈資料

寄贈者	資料名	点数
緒明 春雄氏 (東京都)	「陸海軍聯合大演習之図」(板絵)	1点
個人 (三島市)	自動車カタログ(1930年代)ほか	1式
個人 (三島市)	『三島北上・石の神さま仏さま』(冊子)	1式
個人 (三島市)	『女子新国語読本』(三島高等女学校にて使用)、くけ台	8点
川口 英男氏 (三島市)	三島宿関係資料、浮世絵、書画ほか	1式

寄贈 資料の紹介

史料集「秋山富南編豆州志稿」(PDF版)平成30年3月30日刊行予定 ※

伊豆国の代表的な地誌である『豆州志稿』原本13巻の写真を掲載したものです。写本を底本とした影印本が『復刻版』としてすでに出版されているため、PDF版(データCD)のみの頒布となります。

史料集「秋山富南伊豆勝覧」平成30年3月30日刊行予定 ※

『伊豆勝覧』は伊豆国内の主な地名について古代から中世の関連する和歌を引いて紹介し、考察を加えているものです。『豆州志稿』に先立って書かれたものであり『豆州志稿』編纂の過程を知る上で貴重な資料です。

「安久杉山家文書目録2」平成30年3月30日刊行(頒布価格未定) ※

杉山家は江戸時代に安久村の名主、明治時代に戸長や中郷村長などを勤め、和歌などの文化的な活動にも積極的に関わっていた家です。昨年度刊行の目録の続編にあたり、近代の書状や掛軸等を収録します。

※文化庁「平成29年度地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を受けて、三島地域資料研究会が刊行

「三島宿関係史料集9(三島問屋場・町役場文書)」平成30年3月30日刊行(頒布価格未定)

人馬継立の手配など宿場機能の中核を担った問屋場に関する文書の翻刻です。江戸時代の交通史や三島宿について研究したい方には必読の一冊です。

「三島市郷土資料館研究報告10」平成30年3月22日刊行予定(頒布価格未定)

今年は明治維新150周年の節目の年に当たり、当館では幕末・明治に関する企画展を準備中です。今回の研究報告は企画展に向けた調査研究の成果を中心に収めた、近世～近代の三島をより深く知るための一冊です。

【内容】

葦山反射炉運用と鍛冶職	橋本敬之
寺子屋・私塾から学制へ—明治初期における地方教育—	桜井祥行
三島市域の大区小区制について	平林研治
贅川家文書から見る明治末期の駿豆電気鉄道	平林研治
[資料紹介]関守敏氏所蔵「三島宿問屋場・伝馬所旧蔵文書」に関する覚書	
—幕末・明治維新期の三島宿関係史料—	柿島綾子
幻に終わったセルロイド製造工場設立計画—明治末期三島町における経済振興策として—	笹山曜子
「ジオツアー三島宿」の成果(6)箱根西坂、五ヶ新田の石燈籠	木ノ内倫弘・増島淳

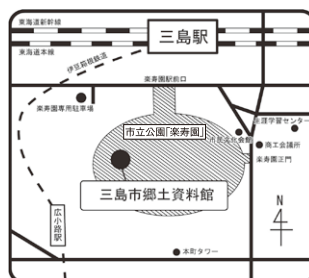
郷土資料館のご案内

〒411-0036 静岡県三島市一番町19-3 楽寿園内
TEL 055-971-8228 FAX 055-971-6045

開館時間 午前9時～午後5時(4月～10月)
午前9時～午後4時30分(11月～3月)

休館日 毎週月曜日(祝日のときは翌平日)、
年末年始

入館料 無料(ただし楽寿園入園料として別途
300円がかかります。15歳未満は無料、
学生は学生証提示にて無料。)



三島駅(南口)から徒歩5分。

郷土資料館だより

Vol.40 No.3(第120号)

発行日 平成30年3月15日(年3回発行)

編集 三島市郷土資料館

発行 三島市教育委員会

E-mail : kyoudo@city.mishima.shizuoka.jp

URL : <http://www.city.mishima.shizuoka.jp/kyoudo/>